

天然記念物の保護が地域を興す

兵庫県立大学教授・県立コウノトリの郷公園研究部長

池田 啓

特別天然記念物コウノトリは日本で繁殖していた集団が昭和四六（一九七二）年絶滅し、渡り鳥として年に数羽が時折飛来するだけとなっています。最後の繁殖地であった兵庫県但馬地域では、昭和四〇（一九六五）年から保護・増殖する計画が進められ、平成元（一九八九）年にはじめての雛が誕生し、その後順調に羽数が増えてきました。そこで飼育繁殖しているコウノトリを野生復帰させることを視野に入れて、県立コウノトリの郷公園を設立しました。そして現在では飼育羽数が一一四羽となり、いよいよ西年の今年、野外に試験放鳥する運びとなりました。

飼育羽数が増え野生復帰が視野に入ってきた平成一四（二〇〇二）年度、兵庫県は「コウノトリ野生復帰推進計画」を

策定しました。そもそもコウノトリは、農薬の使用、営巣場所となる松の木の伐採、農地の整備による環境変化によって絶滅しました。したがって、飼育下で繁殖したコウノトリを野生復帰させるには、放鳥技術の確立はもちろんのこと、定着できるような自然環境の再生とコウノトリを受け入れてくれる社会環境の整備が重要となります。

そこで「コウノトリ野生復帰推進計画」では、希少となった特別天然記念物を保護することにとどまらず、この事業をコウノトリと共生する地域づくり」として取り組むことが掲げられています。水田を採餌場所とするため、魚道を設置したり、また河川横断工の改修やわんどの造成などが取り組まれています。里山の整備では市民参加によるマツの植林が始め



1989年、待望のヒナが生まれ保護増殖事業に弾みがつく

りました。

これには国、県、市町といった行政組織の連携を欠かすことができません。そこで兵庫県は但馬県民局に総合調整役の「コウノトリ翔る地域づくり担当」を、豊岡市は「コウノトリ共生推進課」を企画

部内に新たに置くなど行政内のシステムの変更を行いました。このことよって、推進計画は各部署の縦割りではなく、また国、県、市町の横割りでもなく、相互に連携して円滑に進められるようになりました。

一方、農業者はアイガモを用いた減農薬や冬期湛水を組み込んだ有機農法による環境保全農業に取り組み始めました。これによって豊富な生き物が生息する水田をつくり、コウノトリの採餌場として活用しています。このようにして生産された米や農産物は、兵庫県または豊岡市のブランド（「コウノトリの舞」として商標登録）となり、地元の農協やスーパーが販路を確保して、この地域の農業生産者と阪神間の消費者をつないでいます。

もちろん行政だけでなく、地域住民をはじめさまざまなセクターが自らの発案にたって行動を起こしています。NPO「コウノトリ市民研究所」は環境教育を、商工会議所はコウノトリ商品券、小学校では総合学習や生活科の課題としてコウノトリを取り上げています。これらさまざまな活動を相互に話し合い、協働して進



郷公園の前にある田んぼはビオトープ化され、子どもたちの声が響く

められるように地域の各種団体、事業者、学者、行政が同じテーブルについて「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」が平成一五（二〇〇三）年度に立ち上がっています。昨年一二月には、日本野鳥の会会長でもある柳生博さんを会長に「コウノトリファンクラブ」が設立され、地域外の人々とのネットワークづくりも始まりました。

県立コウノトリの郷公園ではGISを用いた地域の環境把握、放鳥するコウノトリのトレーニングなど、野生復帰計画に基づく事業を科学的に進めるための実践的な研究を行い、野生復帰の中核とし

ての機能を果たしています。そして、施設の中にある豊岡市立文化館コウノピアとともに、飼育しているコウノトリを間近に見ながら、その生態や歴史、さらに自然について学ぶことができる場を提供、年間一七万人もの来園者が訪れています。かつてコウノトリはツルと親しく呼ばれ、地域の人々の営みの中にいました。しかし人々の営みが変わることでツルは数を減らし、保護すべき対象としてコウノトリと呼ばれるようになり、人々の生活とは切り離された関係になってしまいました。しかし、コウノトリが保護され数を増し、いよいよ野生復帰となっていく過程で、コウノトリをシンボルとして自分たちのかつての生活や文化を再発見する契機が生まれました。コウノトリから出発し、連想ゲームのようにして地域全体の営みに視野を広げ、コウノトリと地域がもつ関係性をトータルに見るようになったわけです。このプロセスがあつた野生復帰計画と活動に結実していったように思えます。

いよいよ今年九月、コウノトリが大空へ羽ばたきます。